

か、そして村岡の学問的営みは当時の西洋哲学関係書の受容の流れのなかでどのように理解できるのかという作業の積み重ねが必要不可欠である。そして、こうした作業の積み重ねを通して、近代日本思想史の展開に村岡を位置づけるための新たな地平がみえてくるのではないだろうか。

以上、評者なりの所感を述べたが、「評伝」研究という制約のなか、どこまで以上の点を反映させることができるのか、ないものねだりを述べているとも感じる。もとより評者は近代日本思想史を専門としているわけではなく、断片的に村岡典嗣の研究を行ってきたに過ぎない。近代日本の思想の展開についての素養も乏しく、多くの誤読や曲解もあるうし、正鵠を得た評価ができていくか心許ない。しかし、著者が「あとがき」において、「この本が誘い水になることで、第二、第三の評伝や、より豊かな研究が世に出ることが筆者の願いであり、それを切に願う者である」と述べている一文をみると、微力ながら村岡研究に従事してきた一研究者として、本書を「誘い水」として何かしらの応答をする必要性を実感している。ある人物の「評伝」の研究を通して、いかにその人物の思想の新たな側面を提示することができるのかという点に思いをめぐらし、また今後の村岡研究の進むべき道について数多くの示唆を得ることができた一冊である。

(岡山大学教授)

中野目徹編

『近代日本の思想をさぐる ——研究のための15の視角』

(吉川弘文館・二〇一八年)

松田 宏一郎

「思想史」を英語で言うところの Intellectual History (ちなみに日本思想史学会はこれを採用している) なのか、History of Ideas なのか、History of (通常いって) Japanese とか Political とった限定の言葉が入る) Thought なのか、厳密な限定は不可能で、実際には個々の研究者が好みに応じて何となく手法と対象を選んできた。したがって、複数の執筆者による本でも「思想史」の定義ははっきりしないのが普通である。しかし本書の場合は、研究対象を、統括された意図を表現する作品としてではなく、「史料」として扱うべきことを一貫して主張し、多くの成果を挙げてきた編者のもとに、若手・中堅研究者がそれぞれの研究関心に即しながらも、方法論を共有することで成立したという点で方法意識が極めて明確な珍しいものである。本書の副題は「二五の視角」とあるが、「視角」が一五あるのではなく、視角はあるいは地平は共有しつつ、トピックが一五あるというのが

開講の辞 (中野目)	15の視角				
	第1講 結 社 (水谷)	第2講 家 族 (田中)	第3講 地 域 (大庭)	第4講 学 校 (真辺)	第5講 留 学 (青木)
Ⅱ 媒体 (思想を伝える 素材)	第6講 新 聞 (中川)	第7講 公文書 (熊本)	第8講 教科書 (竹田)	第9講 書 物 (大沼)	第10講 雑 誌 (中野目)
Ⅲ 手法 (思想を分析 する枠組み)	第11講 文献学 (高橋)	第12講 概 念 (木村)	第13講 アジア (世沼)	第14講 読 者 (長尾)	第15講 翻 訳 (中野目)

正しい。

中野目「開講の辞」九頁に、本書の全体構成が図として掲げられている(上の図を参照)。この図は縦軸が三、横軸が五の、合計一五コマのマトリックス表になっており、各論文がその一五の欄に配置されている。表を見ると分かるが、驚くべきことに作品や著者という欄がない。「空間」、「媒体」、「手法」の大分類の下に、対象に即した事象が並ぶ。作品は「媒体」、つまり印刷や頒布形態に分解され、思想家はそれ自体の居場所を与えられず、マトリックス空間を漂っている。つまり作品分析や著者分析はしないということである。ま

た興味深いことに「概念」は「手法」の下位のカテゴリーとなる。各項目は史料的にも方法的にも等価なので、作品のカノン化も思想家の意図の特権化もおこなない。それどころか「思想」も特別扱いされない。「思想史」が「思想」を特権化、あるいは少なくとも前景化することがあたりまえだと思ってきた評者のような読者には少なくない衝撃である。もちろん、本書

の執筆者達が最も厳しい目を向けるであろう、「内在的理解」を僭称する我田引水の読解は居場所がない。多くの新進研究者にここまで研究手法的感化を与え、しかも多様な研究対象に取り組むことを奨励してきた編者の力量にまずは敬服する。

二

個々の章の紹介に入ろう。まず第一部は〈空間〉というカテゴリーである。水谷悟「益進会と大正地方青年」は、大正期に民本主義の思想家として知られる茅原華山を中心に雑誌『第三帝国』を発行した結社益進会の担い手と活動の分析である。「益進主義」とは人間が世界の改善に積極的にかかわるべきだという、アメリカのプラグマティズム哲学の思想家ジェイムズなどが説いた思想であるが、その理念を掲げた地方読者の組織化と減税運動や普選運動の実践の様相が描かれる。水谷はすでに『雑誌『第三帝国』の思想運動』(ぺりかん社、二〇一五年)を著しているが、本論は茅原の腹心であった鈴木正吾と熱心な読者で会の地方幹事となった金子洋文に焦点を絞っている。中央で活躍する著名人の動きだけでは大正期の政治運動の実態はわからないというメッセージが込められている。分析対象の様態は第三部の長尾論文と似ているが、こちらは「結社」で、長尾論文が「読者」というカテゴリーなのは、政治的目標の強弱を編者が微妙に判断したのだろうか。田中友香理「長善館と鈴木家」は、新潟にあった漢学塾長善館の当主を代々担っていた

鈴木家から出た鈴木虎雄（日本新聞社に入り、後に京都帝国大学教授。『羯南文録』を編纂した）が題材である。虎雄は、養子になった大橋家と離縁し、大学で漢文学を講じる立場を得て「家業」の漢学を継承しようとしたという。学資の獲得を目的とした養子縁組が思想形成に与えた影響に着目するということだが、肝心の「思想」の本身はよく分からなかった。実は「家業」の変容と教育投資の社会学的研究に進むことを狙っているのか。

大庭大輝「思想史の場としての佐渡」は、『北溟雜誌』、『佐渡新聞』が佐渡の言論空間とも呼ぶべき場として果たした役割と北一輝、吟吉兄弟との関わりを追う。北兄弟のように地方の裕福な家庭から高等教育を受けて中央に活躍の場を見いだす例は数知れない。北兄弟に佐渡的特殊性は見いだせるのか。また近世的「一国意識」が佐渡において解体していく過程と北兄弟の経歴を重ね合わせようとする意図は見えるが、具体的に北兄弟の著述などとの対応関係はあるのだろうか。真辺将之「東京専門学校と「早稲田精神」」は、「早稲田精神」と「学風」というものが時代の潮流とともに変質したという物語だが、それにかわる人々のエピソード自体の面白さはともかく、「早稲田精神」なるものが実体として存在しているかのようで、それがイデオロギーとしてどのように機能したのかといった分析を放棄している。しかし「精神」を実体化しないのは本書の方法論的約束ではないのか。編者のチェックをすり抜けたのであろう。

青木一平「漱石門下安倍能成の洋行」は、国家に与えられた課

題にしたがって日本に「文明」を持って帰ろうと奮闘し苦悩した漱石の世代とは異なり、安倍能成の世代にとって留学とは自己の見聞を広めることであった。学問そのものは日本で本を読んでいた時代故の態度ではある。しかし安倍は現地で学問を志す人々と討論しようとは思わなかったのだろうか。

第二部は「媒体」というカテゴリーである。中川未来「新聞『大阪朝日新聞』と高橋健三」は、明治二六年から三一年までの、ちやうど対外硬運動と日清戦争の時期に『大阪朝日新聞』の論調を主導した高橋健三（陸羯南との交友で知られる）の主張と、「アジア情報」の媒体としての新聞の役割をからめて分析している。中川の単著『明治日本の国粋主義思想とアジア』（吉川弘文館、二〇一六年）を補足する内容になっている。通常「アジア情報」というものは権益が安全か、投資して損はしないかということについての情報に、文化論らしき装飾が貼り付けられたものであった。しかし高橋入社後の『大阪朝日新聞』は、中国文明は評価し、清朝を「夷狄」として文明の障害物視する、朝鮮は日中共同で改革すべき対象とみなす、という路線が強くなったという。こういった論調が読者（紹介されるのは大阪の中農の日誌）にも影響を与えた可能性が駆け足で言及されるが、今後読者の個人文書発掘に研究が進むのかもしれない。熊本史雄「外務省記録にみる「協調主義」のゆくえ」は、第一次大戦後の「協調主義」外交がその後「大東亜共栄圏」構想に

転換するのは、北部仏印進駐を契機とした事象であったことに着目する。外交方針上、第一次大戦以降の対中および対英米外交方針がなしくずしの変化により「単線的」につながっていたわけではないことが論証される。外務省記録の文言の内容だけでなく、起案者が誰かとか、決済の優先順位がどうだったかまで手続きの機微をとらえ、それを通じて責任者（この論文では、小村欣一、幣原喜重郎、重光葵）の思考の内側を明らかにする説得力のある論文であり、外交思想史として明確な方法意識を示している。竹田進吾「歴史教科書思想史」は、三宅米吉および三宅が主導した歴史教科書出版社である金港堂の教科書の内容の変遷をたどったものである。教科書の記述内容にある種の「思想」があることはわかるが、それが現場でどう教えられていたのかと組み合わせる考えなくともいいのだろうか。大沼宜規「明治国学者の蔵書形成」は、考証派国学者木村正辞が『万葉集』（だけではないが）の諸本を集め、校合し、丹念に用いられた字と訓を確認していった過程の総体を木村の思想と考えるべきで、木村により刊行された研究成果はその一部に過ぎないことを論じ、さらには蔵書研究が思想家のみならず思想家間のネットワークの研究に重要な意味を持つことを主張する。文中に指摘があるとおり、善本をさがす学者のネットワークは近世後期から見られる。木村のケースが「明治」国学者的であるのは、具体的にはどういった行為や思想内容を指すのであろうか。

中野目徹「大正期の『日本及日本人』と三宅雪嶺」は、当時の

『日本及日本人』の「主筆」を三宅が自認しながらも、当該誌の論調が統一されておらず、中でもおよそ三宅の立場とは相容れない三井甲之の論調が浸食していくのをそのままにしていた不思議な状態を記述している。

第三部は「手法」というカテゴリーである。「手法」はメソッドを指すわけでは必ずしもなく、「空間」や「媒体」に分類しにくい対象の取り扱い方を概括したものである。高橋禎雄「村岡典嗣と日本思想史学」は、村岡の広島高等師範学校時代と、東北帝国大学時代の講義ノートを手がかりに、歴史法則よりも一回的な経験の内在的理解を主眼とするドイツ西南学派の歴史哲学への志向と「日本思想史」研究が結びついていく過程を考察する。初期の著作初版の『本居宣長』で参照されていた文献学は、その後の留学と講義において歴史哲学として深められ、「日本思想史」の研究方法論へと高められていった。紙幅があれば村岡によるドイツ歴史哲学理解の内容にもっと入り込めたであろう。木村直恵「明治期における「社会」概念」は、福地桜痴による *society* の訳語としての「社会」の含意から始めて、明治十年代に民権派や政府側の言論で「領有」されていった過程を描く。いずれの用法も政治言論業界で支配的ななることはできず、「社会」の語は意味の重層性と大きな振れ幅をもった。そしてどこかの時点で「対等性」と差異の尊重「や「自己統治」の要素は忘却されたという。残念ながら概念分析の方法論についての説明が長く、史料分析が少ない。また結局

いまだに柳父章に頼らねばならないほど、歴史学的概念分析の分野は長い間方法的に進歩がなかったということだろうか。笹沼俊暁「アジアの中の人文学」は、日清戦争後に「国文学」についての議論が活発化されたこと、並行して「台湾文学」というジャンルの「発明」がなされ、国民国家に従属する「文学」という思想が強化されていった様相を分析する。さらに現代の台湾などで「アジア」が論じられる時に、あらゆるナショナリズムを否定する方向ではなく、むしろナショナリズムを含み混んだ形で「アジア」が論じられる傾向を指摘し、日本の近代化への評価がアンビバレントであること、日本の研究者がそのことをよく理解できていない危険性にも言及している。長尾

宗典「『誌友交際』の思想世界」は、中央の有力雑誌の投稿者などが「誌友」という意識を確立し、それに基づいて立ち上げた地方文芸同人誌が読者研究の格好な素材であることを、岐阜の郷土史家小木曾旭晃の『地方文芸史』に紹介された情報と、小木曾自身が発行していた雑誌『山鳩』などを手がかりにして、「思想伝達の回路」としての地方同人誌の役割を分析する。地方文芸誌では、「成功」「享楽」「煩悶」といった当時流行していたテーマに「一向無感覚であった」という小木曾の指摘が、中央論壇中心に思想潮流を把握しようとする傾向を相対化する視点が当時もあったことを示している。中野目徹「翻訳 Nationality をめぐって」は、政教社のメンバーであった志賀重昂と棚橋一郎が関わったいくつかの辞書の nationality の

訳語をたどり、『日本人』が掲げた「国粹」という語の理解が、志賀と棚橋、菊池熊太郎ら同人の間で食い違っており、訳語として安定しただけでなく、含意のブレ幅が大きかったことを明らかにしている。

三

編者の中野目氏は、公刊史料に頼らず、後知恵や輸入されたもつともらしい「理論」と称する枠組みを使わず、研究者が自分で見つけ出した原史料を使って、同時代でこそ意味をもった人物の個性や事件の意味を描くことを徹底して実践してきた。評者も同世代なので理解できるところがあるが、研究者としての訓練を受け始めた頃、歴史学の世界では、まだ階級闘争史観は退場しておらず、根拠の怪しい「近代化」や「日本特殊性」の議論も横行していた。その状況に理論闘争を仕掛けるのではなく、自己の研究の実践そのもので挑戦してみせることには大きな意味があった。また同じ頃、政治史分野でも政治家・官僚の書簡や未公刊文書などを使った研究が増えてきていたことに強く影響を受けた。中野目氏の業績とそれに続くこととする本書の執筆者たちの努力があったからこそ、今日では、校訂が必ずしも信用できない「全集」のつまみ食いをして、あやふやな感想や問題意識の表明を間にはさむような「思想研究」は（だいたい）駆逐された。

それぞれの章が興味深い論点と情報を提供しており大変有益

であるが、それでも気になる点について触れておきたい。

まず、タイトルにある「近代日本」という分野の区切り方は有効だろうか。本書で使われた史料はほとんど近代日本語の散文であるという意味ではそれでもかまわない。しかしそのことが「近代日本」というものを安全な密閉空間にしている危険性がある。本書では、古典漢文も近代中国語も朝鮮語も（笹沼論文を別にして）史料に含まれない。西洋語についても断片的な語彙は参照されているが、西洋語による概念の同時代のグローバルな（西洋諸国だけでなく中国・朝鮮を含む）広がりや意識されていくようなものである。まるで「近代日本の思想」は近代日本散文の文体と語彙のみで成立しているかのようなのである。

もう一点は、明確な反西洋化主義、土着主義の思想が検討対象にならないのは不思議である。個人主義も男女平等も自由な移動も大嫌いな人たちにも思想のメディアがあり、中央の指導的知識人との協力や葛藤関係があった。研究対象選択にあたってモデレートな立場を好ましいとする共有された空気でもあったのだろうか。なお、文献リストで当該章の執筆者のものだけ五十音順でなく末尾に置くというのは不必要な謙遜である。

（立教大学教授）

岩田真美・桐原健真編

『カミとホトケの幕末維新 ——交錯する宗教世界』

（法蔵館・二〇一八年）

繁田 真爾

本書が世に問われた二〇一八年は、いわゆる「明治維新一五〇年」にあたる年であった。そのことは偶然ではなく、「あとかき」によれば、その「節目」に合わせて本書を出版することに著者たちのこだわりがあったらしい。ただしそれは、単に節目を記念したいからというわけではない。逆に、「維新」を日本の近代化の出発点として言祝ぎようとする、政府をはじめとする各種行事などへの違和感、あるいは「維新」によってそれまでのすべてが改められたとする固定的歴史観への異議申し立てこそ、本書が目指そうとしたところで、そのスタンスは明快だ。そうした本書のねらいについては、編者の一人、桐原健真による「はじめに」に詳しい。ここでは、桐原が繰り返し強調している、次の二点に注目しておこう。一つは、従来の学術研究では「近世と近代との断絶性」を強調する研究が多いが、本書では幕末維新期という時代を、むしろ近世と近代を「架橋する結節点」として理解したいということ。いま一つが、（政治や経済ではなく）思想や宗教などの「文化史」の視座からそのこ